

2018年3月20日

第10回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞
日本のスポーツを支える「縁の下の力持ち」を表彰
受賞者決定および表彰式開催のお知らせ

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)は、平成29年度「第10回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」(後援:公益財団法人日本体育協会、公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会)の受賞者を決定しました。

本賞はスポーツ振興に多大な実績を残すとともに、社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰するもので、「縁の下の力持ち」にスポットライトを当てているのが特徴です。また本賞は「功労賞(長年にわたるスポーツ振興への貢献や先駆者として実績を上げた人・団体を表彰)」と「奨励賞(今後のスポーツ振興に大きな影響力が期待され、その年に極めて高い成果を上げた人・団体を表彰)」で構成されます。

なお、表彰式を平成30年4月13日(金)に如水会館(東京都千代田区)にて開催します。

第10回受賞者のご紹介(敬称略)



[奨励賞] 狩野 美雪 (かのう みゆき)

トップ選手の経験を活かした指導で
デフバレーボール日本女子代表を金メダルに導く

デフバレーボール日本代表女子チーム 監督

推薦者: 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会

※功労賞は該当なし

※この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。(担当:山本)

■ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 概要

本賞は、スポーツ振興において多大なる実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰し、受賞者のたゆまぬ努力と成果に敬意を表するものです。競技、指導、研究、普及、ジャーナリズムなどさまざまな分野において功績を挙げた「縁の下の力持ち」にスポットライトを当てるとともに、受賞者の実像を通してチャレンジすることの尊さや、「努力は報われる」という信念を社会に広げることがをめざした表彰制度です。

	対象	選考のポイント	賞典
功労賞	長年にわたるスポーツ振興への貢献や、先駆者として実績を挙げた人・団体	長年もしくは過去に行われ、年数を経てから高い成果と認められた尊敬に値する礎的、先駆的な取り組みであること(指導者、研究者、審判、ジャーナリストなどによる、その競技やスポーツ全体の底上げに貢献した活動など)。	賞金 100 万円 (団体は 200 万円) 賞状・メダル 副賞
奨励賞	今後のスポーツ振興に大きな影響力が期待される、その年、極めて高い成果を挙げた人・団体	短期的、もしくは中期的に行われ、その年に高い評価を受けた賞賛に値する取り組みであること。たとえば世界レベルの成果を発揮するにあたり、重要な役割を果たした指導者、研究者、サポートメンバー、審判、ジャーナリストによる活動など。	

■選考委員会 (敬称略／五十音順／平成 30 年 2 月 28 日現在)

選考委員長	浅見俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
選考委員	伊坂忠夫	立命館大学 スポーツ健康科学部 学部長 教授
	衛藤隆	東京大学 名誉教授、大阪教育大学 客員教授
	遠藤保子	立命館大学 産業社会学部 教授
	景山一郎	日本大学 生産工学部 教授
	川上泰雄	早稲田大学 スポーツ科学学術院 教授
	北川薫	梅村学園 学事顧問、中京大学 名誉教授
	草加浩平	東京大学 大学院 工学系研究科 機械工学専攻 ディレクタ
	小島智子	追手門学院大学 客員教授
	定本朋子	日本女子体育大学 大学院 研究科長、基礎体力研究所 所長 教授
	篠原菊紀	諏訪東京理科大学 共通教育センター 教授
	杉本龍勇	法政大学 経済学部 教授
	高橋義雄	筑波大学 体育系 准教授
	福永哲夫	東京大学 名誉教授、鹿屋体育大学 特任教授
	増田和実	金沢大学 人間社会研究域人間科学系 教授
	丸山弘道	株式会社オフィス丸山弘道 代表取締役
村田互	専修大学 ラグビー部 監督	
ヨコ セッターランド	公益財団法人日本体育協会 常務理事	

※競技団体、大学、報道機関、ジャーナリスト等から候補者の推薦を募り、2 回の選考委員会を経て決定

第 10 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 [奨励賞]

トップ選手の経験を活かした指導で デフバレーボール日本女子代表を金メダルに導く

かのう みゆき
狩野 美雪

(1977 年生・東京都出身) デフバレーボール日本代表女子チーム 監督

東京学芸大学卒業後、V・プレミアリーグの茂原アルカスや久光製薬スプリングスの主将として活躍。2008 年には全日本に選出され、北京オリンピック世界最終予選と北京オリンピックに出場した。2010 年、フォルトゥナ・オーデンセに入団し、2010-11 デンマークリーグでのプレーを最後に引退。帰国後、デフバレーボール日本代表女子チームの監督に就任した。トップ選手として活躍した豊富な経験や人脈を活かした指導、またより良い強化体制のための環境整備にも積極的に取り組み、チームを 2013 年デフリンピック・ソフィア(ブルガリア)大会で銀メダル、2017 年デフリンピック・サムスン(トルコ)大会では 4 大会ぶりの金メダルに導いた。

安定感にあふれた守備と幅広い攻撃が持味のユーティリティ・プレーヤーとして、V・プレミアリーグやデンマークリーグ、また全日本では北京オリンピック等で活躍。2011 年に現役を引退すると、大学時代の後輩で、卒業後も親交のあった今井起之前監督の要請でデフバレーボール日本代表女子チームの合宿にコーチとして参加した。その直後、33 歳の若さで今井氏が急逝。「できる・できない、やりたい・やりたくないではなく、やるべき」と決意を固め、闘病中に「万が一の時は頼む」と伝えてきた今井氏の思いと、周囲の熱望に応えるかたちで監督に就任した。

しかし、戸惑いも少なくなかった。「選手とのコミュニケーションの取り方もつかめず、これくらいはできるだろうと組んだ練習メニューも予定通りには進められなかった」と就任当初を振り返る。同時に長く付き合ってきたバレーボールが、「いかに聴覚情報を必要とするスポーツかということに初めて気づいた」。選手ばかりでなく、競技に関わる多くの人々が聴覚障害者であるデフスポーツの世界では、「自分こそがマイノリティなんだ」という意識を強く持つようになっていった。

実際の指導の場面では、協会スタッフやコーチなどと議論を重ねながら、視覚によって伝える指導に注力した。たとえば健聴者が手に当たる音で瞬時に判断しているブロック時のボールの軌道変化を、ゴム紐を使って見える化した工夫もその一つ。また、「ボールを切る」「トスが割れる」といった手話通訳を介しては伝わりにくい専門的な言葉遣いを改めるなど、技術指導のメソッドを一つひとつ積み上げていった。良いプレー・悪いプレーを見せ

て理解させるため、現役時代の仲間であるトップ選手に協力を願って合宿に足を運んでもらうこともたびたびあった。

しかし、結果はすぐには出なかった。2012 年の世界選手権は 5 位。日本デフバレーボール協会の大川裕二理事長は、「ここがターニングポイント。その惨敗から明らかに練習の質と量が変わった」と話す。チーム内で細かくプレーの約束事を共有し、その基本動作を徹底して反復した。また、練習後には必ず 1 時間の体カトレーニングが行われるようになった。そうして迎えた 2013 年デフリンピック・ソフィア大会では、準決勝で強豪アメリカをフルセットで下す粘り強さを見せ、銀メダルを獲得した。

大会後、2017 年サムスン大会を見据えて 4 年間の強化計画を組み、新たに東西二つの拠点を設けて強化の効率化に取り組むなど環境改善にも奔走。目標は、金メダルのみ。健聴者のプロチームとのマッチメイクやVリーグ機構への募金の働きかけ、賛同者を増やすために苦しい講演等も積極的にこなし、

時には選手の勤務先に足を運んで理解を請うなど、コート外でも強化のために動き回った。

そうしたチャレンジの末、昨年のサムスン大会では 4 大会 16 年ぶりの金メダルを獲得。高さやパワーのある強豪国に対し、鍛えてきた日本の強み「ひろう・つなぐ粘り強さ」と「徹底した約束事の遂行」、そして磨き上げた「緻密なプレー」で目標に到達した。次なる目標は 2021 年デフリンピックでの連覇。「もちろんそこを目指しながら、日本デフバレーが次のステージに進むための土台を作りたい」と新たなチャレンジを開始する。



■歴代受賞者（敬称略）

第1回 平成20年度	功労賞	中野 政美（柔道指導者） 女子柔道の世界レベル選手の育成と女子柔道の発展
	奨励賞	丸山 弘道（車いすテニス指導者） 北京パラリンピック金メダルへのチャレンジ
第2回 平成21年度	功労賞	塚越 克己（スポーツ医・科学研究者） 日本のスポーツ医・科学の発展を牽引した「縁の下の力持ち」
	奨励賞	増田 雄一（アスレティックトレーナー） トップレベルのサポート技術を一般レベルに拡大する取り組み
第3回 平成22年度	功労賞	高田 静夫（サッカー審判員） 日本人審判員の育成をめざした各種制度の確立と運用
	奨励賞	中村 宏之（陸上指導者） 雪国から世界をめざすトレーニングの独自開発と実践 中北 浩仁（アイススレッジホッケー指導者） 強化システムの大改革で日本初のメダル獲得にチャレンジ
第4回 平成23年度	功労賞	岸本 健（スポーツ写真家） スポーツ写真家の草分けとして、スポーツ報道の機会拡大に貢献
	功労賞	水谷 章人（スポーツ写真家） 独創的な表現でスポーツの魅力を伝え、スポーツ写真家の育成・環境整備にも尽力
第5回 平成24年度	功労賞	樋口 豊（フィギュアスケートコーチ、振付師、解説者） 国際的な信頼と幅広いネットワークを活かし、日本フィギュアスケートの「開国」に貢献
	奨励賞	江黒 直樹（ゴールボール女子日本代表チーム ヘッドコーチ） 「楽しいリハビリスポーツ」の普及をめざした 日本女子ゴールボールチーム 金メダルへの挑戦
第6回 平成25年度	功労賞	臼井 二美男（技師研究員、義肢装具士） スポーツ用義足の第一人者として「走る喜び」を提供する挑戦
	奨励賞	東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会 戦略広報部 戦略広報という立場から東京2020招致を支えたプロフェッショナル
第7回 平成26年度	奨励賞	妻木 充法（医学療法士、鍼灸あん摩マッサージ指圧師、日本体育協会公認アスレティックトレーナーマスター） 公正なジャッジを支える「鍼治療」の技術 門田 正久（理学療法士、日本体育協会公認アスレティックトレーナー、日本障がい者スポーツ協会公認スポーツトレーナー、介護予防主任運動指導員） 障害者アスリートのメディカルサポート環境を拡充する取り組み
	功労賞	藤原 進一郎（日本障がい者体育・スポーツ研究会 元・理事長、日本障がい者スポーツ協会 元・理事、技術委員会 元・委員長、日本パラリンピック委員会 元・運営委員、極東・南太平洋身体障害者スポーツ連盟 スポーツ委員会 元・委員長） 「すべての障がい者の生活者にスポーツを——」その信念を貫いた40年
第8回 平成27年度	奨励賞	中島 正太（15人制男子ラグビー日本代表チーム／7人制男子ラグビー日本代表チーム アナリスト） 先端技術を駆使したデータ分析で、ラグビー日本代表の躍進に貢献
	功労賞	今村 大成（株式会社タマス 取締役/Tamasu Butterfly Europa GmbH 社長） 日本若手卓球選手の武者修行を支え続ける「デュッセルドルフの父」
第9回 平成28年度	功労賞	今村 大成（株式会社タマス 取締役/Tamasu Butterfly Europa GmbH 社長） 日本若手卓球選手の武者修行を支え続ける「デュッセルドルフの父」
	奨励賞	野口 智博（日本大学文理学部 教授/木村敬一選手/パーソナルコーチ） 障害者スポーツ全体の課題に先鞭をつけた挑戦 ～トップ選手の指導からパラアスリート強化の現場へ～